

民主的な国家・社会の形成者として 必要な資質・能力を育む社会科学習

坂田 秀一，小田 修平

1 社会科において育成すべき資質・能力

平成29年3月，新学習指導要領が告示された。今回の改訂は，子どもが地域で成長することを鑑み，「学びの連続性」が従来よりも一層重視されている。世界の教育の動きにも着目し，「資質・能力の育成」を目指すために他教科や領域との関連も重視されている。いわば，子どもの成長過程を教育に関わる大人がみんなで協力して見守る「縦の教育」と，育成を目指す資質・能力を総合的に育てる教科や領域等の関連を図る「横の教育」の両方を求めている。

今回示された社会科において育成すべき資質・能力の3つの柱は，以下の通りである。

①知識・技能

社会的事象等に関する理解等を図るための知識と社会的事象等について調べまとめる技能

②思考力・判断力・表現力等

社会的事象等の意味や意義，特色や相互の関連を考察する力，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて構想する力や，考察したことや構想したことを説明する力，それらを基に議論する力

③学びに向かう力・人間性等

主体的に学習に取り組む態度と，多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される自覚や愛情など

3つの柱に沿った資質・能力を育成するためには，課題を追求したり解決したりする活動の充実が求められる。社会科においては従前，小学校で問題解決的な学習の充実，中学校で適切な課題を設けて行う学習の充実が求められており，それらの趣旨を踏襲することになる。

そうした学習活動を充実させるためには，大きくは課題把握，課題追求，課題解決の3つの学習過程に着目する必要がある。それぞれの学習過程を構成する活動である，動機付けや方向付け，情報収集や考察・構想，まとめや振り返りなどの活動を工夫・改善させることが求められている。

社会科における見方・考え方は，新学習指導要領において，以下のように整理されている。

①社会的事象の地理的な見方・考え方

社会的事象を位置や空間的な広がりに着目して捉え，地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で，人間の営みと関連付けて働かせるもの

②社会的事象の歴史的な見方・考え方

社会的事象を時期，推移などに着目して捉え，類似や差異等を明確にしたり事象同士を因果関係等で関連付けたりして働かせるもの

③現代社会の見方・考え方

社会的事象を政治，法，経済などに関わる多様な視点(概念や理論など)に着目して捉え，よりよい社会の構築に向けて，課題解決のための選択・判断に資する概念や理論等と関連付けて働かせるもの

この「見方・考え方」は，新学習指導要領における改訂のポイントでもある「育成を目指す資質・能力の明確化」と，「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進」と大きく関連するものである。特に「深い学び」の鍵として，今後は生徒が学校での学習の中だけでなく，現実の社会生活の中においても，この「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることが鍵となる。

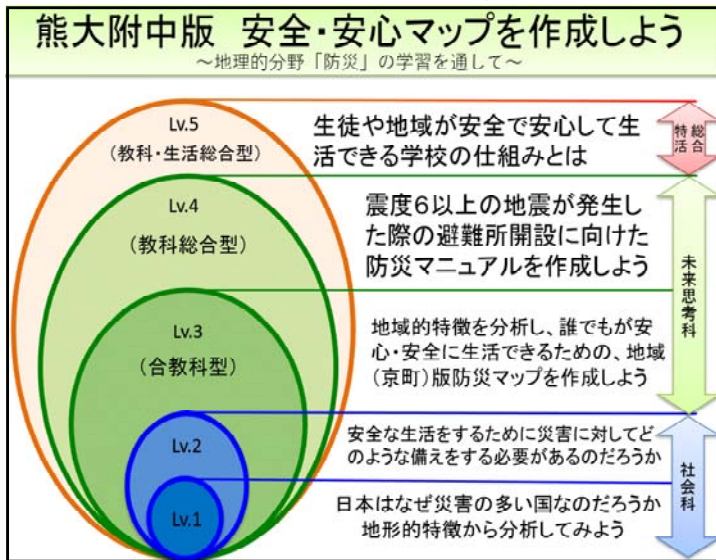
本校社会科では，「見方・考え方」である視点や方法を働かせて，生徒が多面的・多角的な視点で社会事象を捉え，視点毎に課題を分析・追究し，協働して最適解を導き出す学習過程を自覚することで，「民主的な国家・社会の形成者」の育成につながると考え，日々の授業実践に取り組んでいる。

2 社会科におけるカリキュラム・マネジメント

本校では、総合的な学習で扱う学習課題をレベル5とし、各教科で扱うレベル1・2の学習課題と、未来思考科で扱うレベル3・4の学習課題を設定し、教科等横断的な学習を行っている。

学習課題のレベル3とは、ある教科で身に付けた複数の知識・技能、見方・考え方等を関連付けて解決することもできるが、他の教科で身に付けた特有の知識・技能等を統合して解決したほうが望ましい課題である。レベル4とは、ある教科で身に付けた知識・技能、見方・考え方等だけでは解決することができず、複数の教科で身に付けた知識・技能等を統合しなければ解決できない課題である。

そこで、未来思考科において実践した題材「防災マニュアルを作成しよう」について、社会科で学習する場合の学習課題との違いに着目して、学習課題のレベルを【資料1】のように整理してみた。



【資料1】 防災マニュアルにおける課題のレベル

で快適な室内環境、一日に必要な栄養摂取量、食品の保存と食中毒の防止、幼児との関わり方等、さらに、保健体育では、災害から身を守る体力の必要性、自然災害に備えた準備、飲料水の役割等を学習していることに気づく。

そこで、教師がレベル3～4の学習課題を設定すれば、生徒は各教科で学んできた見方・考え方である視点や方法を働かせながら、教科の枠を超えて、何を優先するかによって最適解を導くことにつながるのではないかと考える。

【資料3】は、「学校が避難所になった場合、受け入れ人数を何人とするか」という問いに対する生徒の考えである。この生徒は、各教科で学んだ見方・考え方である視点(項目)を比較し、自分が優先したい視点から結論を導いている。

つまり、各教科の枠を超えて課題を設定することで、教科等横断的な学習が可能となる。教師が各教科で学んだ見方・考え方を働かせる場面や活動を意図的に計画することで、生徒も各教科の学びを活かす場面が増え、新たな課題や改善の方向が明確にされることにつながる。

前述したように、社会科における地理的な見方・考え方は、「社会的事象を位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けて働かせるもの」である。

社会科の「防災」の授業では、災害という社会事象を気候や地形等の条件で分析し、災害に対してどのような備えが必要なのかを追求させるための課題を設定することが多い。

一方、他教科の学習内容を分析してみると、理科では、地震等の災害が起こるメカニズム、また、家庭科【資料2】では、防災に備えた住まい、健康

各教科で学んだことは何だろうか。整理してみました。

家庭分野～第1章 食生活と栄養	家庭分野～第2章 食生活と自立	家庭分野～第2章 食生活と自立
4中學生に必要な栄養素(1日あたり)の必要な食事摂取量 6 食品の保存 6 食品の保存と食中毒の防止 6 食品の保存と食中毒の防止	6 食品の保存と食中毒の防止 6 食品の保存と食中毒の防止	4 健康で快適な室内環境 4 健康で快適な室内環境
年齢・性別 3～5歳 男 1,900 kcal 女 1,750 kcal 10～11歳 男 2,250 kcal 女 2,100 kcal 12～14歳 男 2,600 kcal 女 2,400 kcal 15～17歳 男 2,850 kcal 女 2,300 kcal 20～49歳 男 2,650 kcal 女 2,000 kcal	家庭分野～第2章 食生活と自立 3 災害に備えた住まい方	家庭分野～第2章 幼児の生活と家族 4 幼児との関わり方を考えよう

【資料2】 各教科(家庭科)で学んだ学習内容の分析

受け入れ人数 130人	貯水タンクが150人で20.8から10.8(割) →(半分)
優先したい項目 健康面・精神面ケア 配給する物資の確保	水、130人分としてもタンクの中は余る。 (トイレは使えない水はあ) スペース⇒3階教室も可 附中生徒(177220人1143) = 20x4=80
根拠・理由付け トイレは使えない水はあ、飲料水や食料が足りない可能性があるため、130人分を受け入れる判断をした。	1階と2階⇒1組2組のみ開放 健康面を考え、高齢者は教室を使う ②平均身長160cm ⇒ 177220人 ⇒ 12x6 = 72人 130-72 = 58人 ⇒ 若者(体育館) 物資) 支援物資が届かなくなった場合、物資が足りなくなる ⇒ 避難者の名義から持参 附中生の防災グッズを利用

【資料3】 各教科の学びを生かした解決策の模索

3 未来思考科に取り組んだからこそ見えてきた社会科の授業改善

本校が開発している「未来思考科」は、意図的・限定的かつ現実的な文脈の中で、各教科の「見方・考え方」を働かせながら、各教科の学びと総合的な学習の時間における学びの結びつきを強め、教科等横断的な思考力を育成することを目指した教科である。

一方、社会科では、これまでも問題解決的な学習を重視してきた。しかし、未来思考科において、より現実社会の問題を各教科の「見方・考え方」を働かせながら、最適解を導くような学習に取り組んだことで、社会科においても、「何を学んだか」に加え、「どのように学んだか」という問題解決的な学習の過程を念頭においた単元開発を行う必要性を再認識した。

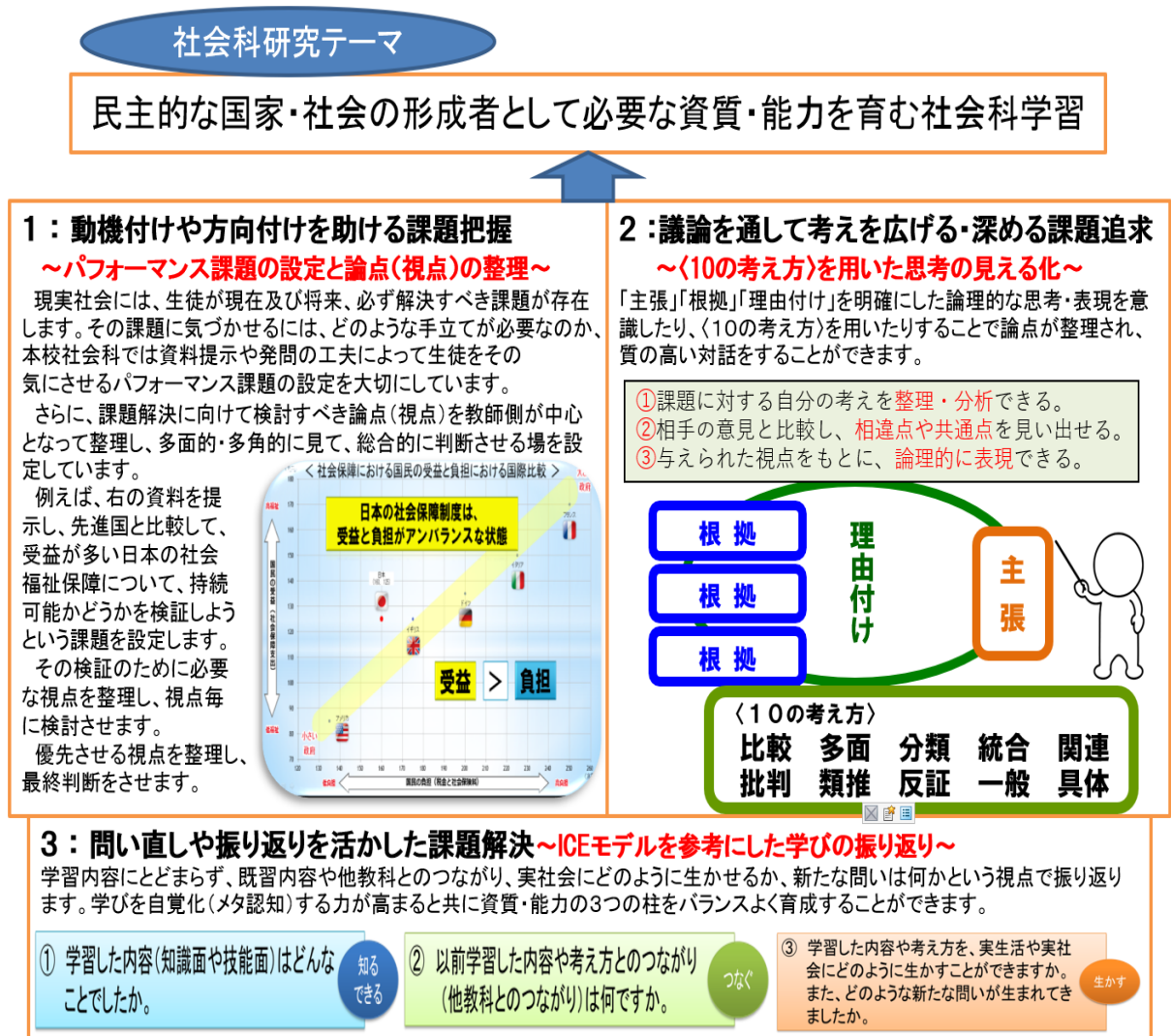
社会科における問題解決的な学習過程とは、①動機付けや方向付けを助ける課題把握→②議論を通して考えを広げる・深める課題追求→③問い直しや振り返りを活かした課題解決である。つまり、教科等横断的な思考力を育成する未来思考科と社会科との関連を図ることは、現実社会の問題を解決していく共通の学習過程を意識させるという点で有用であると考えられる。

関連を図ることで、社会科がめざす民主的な国家・社会の形成者として必要な資質・能力を育むことにもつながる。なぜなら、社会的課題について様々な視点で考察し、実行可能な解決策を構想させることで、より質の高い社会参画力を育成することができるからである。

これを踏まえ、本校社会科では、3つの学習過程を意識して、次のような授業改善に取り組んだ。

- 1：動機付けや方向付けを助ける課題把握～パフォーマンス課題と論点（視点）の整理
- 2：議論を通して考えを広げる・深める課題追求～〈10の考え方〉を用いた思考の見える化
- 3：問い直しや振り返りを活かした課題解決～ICEモデルを参考にした学びの振り返り

この取組をもとに作成した本校社会科の研究構想図を以下に示す。



3つの学習過程を意識した実践例として、公民的分野「国民生活と政府の役割」を紹介する。

(1) 動機付けや方向付けを助ける課題把握～パフォーマンス課題と論点（視点）の整理

現代社会の見方・考え方に、「社会的事象を多様な視点に着目して捉え」とある。そのための動機付けとして疑問や課題を抱かせる必要がある。

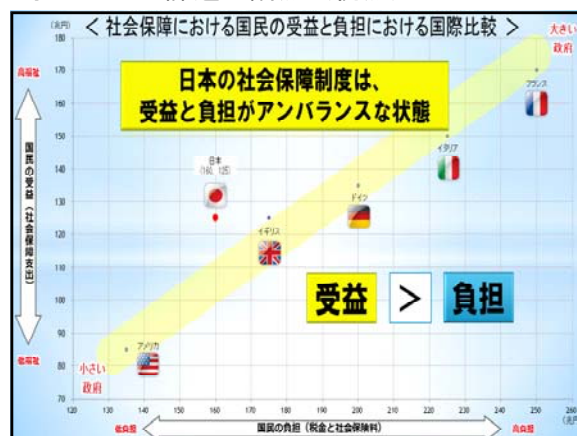
まず、導入において【資料4】を提示した。生徒は「他国と比べて受益が多すぎる」「少子高齢化が進む中で、税収が減り支出が増加すれば、この仕組みは持続できないのではないか」といった疑問や不安も持った。これが動機付けである。

そこで、「あなたなら受益と負担のバランスをどのようにすればよいと思いますか」と問いかけた。生徒は様々な視点から結論を導き出そうとすればするほど、主張がかみ合わないこと、議論が深まらないこと、そして、論点を整理した上で、議論する必要性に気づく。これが方向付けである。

さらに、【資料5】のパフォーマンス課題を提示した。これは、課題が生徒にとって切実であることを意図して設定したものである。切実感を持たせるには、自分の考えを最終的にどこ（この場合は財務省）に向けて発信し、どのように評価してもらえるのかを明確にする必要がある。

また、論点（視点）の整理については、発達段階や既習事項との関連を総合的に判断し整理させる必要がある。しかし、中学校段階において、論点を教師が単純化して整理し比較する視点を与えることで、より多くの生徒が共通の土台で議論に参加し、視点毎議論が深まるのではないかと考える。

そこで、本実践においては、国民の受益と負担について、受益を①医療・②年金・③介護・④子育て支援の4つ視点、負担を⑤所得税・⑥消費税・⑦法人税・⑧保険料の4つの視点、つまり計8つの視点を教師側から提示し、最終的に全体で議論させることにした。



【資料4】資料提示の工夫

日本の社会保障制度は、国民の受益と負担がアンバランスな状態です。高齢化が進む中、将来の医療・年金・介護・子育て支援に予算を配分したいのですが、少子化が進む中では、収入は見込めず、借金も膨らんでしまいます。収入を増やすには税金（所得税・消費税・法人税）や保険料を上げる必要があるのかもしれませんが、持続可能で安心な社会保障制度にするために、あなたなら日本の位置をどの位置に移動させた方がよいと考えますか。提案内容による様々な状況の変化を踏まえた上で、是非、財務省に日本の位置を提案してください。

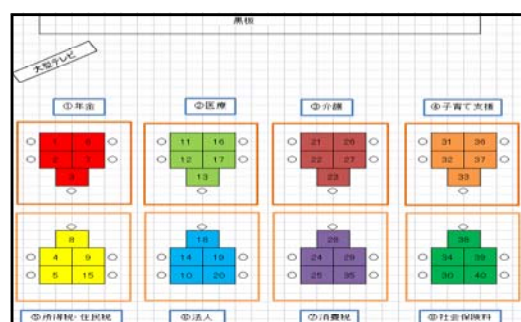
【資料5】パフォーマンス課題

(2) 議論を通して考えを広げる・深める課題追求～〈10の考え方〉を用いた思考の見える化

本実践では、①論点を視点毎に分析することや②自分なりの結論に導く手立てとして、ジグソー学習を取り入れた。手順は次の通りである。

まず、ホームグループを作成し、前述した8つの視点についての担当を決定する。次に、【資料6】のように視点毎のジグソー班に分かれ、国民の受益と負担を変動させることで、どのようなメリットやデメリットがあるのか、資料を分析し、自分の考えをまとめさせる。【資料7】は、ジグソー班内で意見を交換している様子である。国民の受益である年金についての増減が、少子高齢社会にどのような影響を与えるのか、自分が考えた結論の実現・持続可能性についてグループで議論し、多面的・多角的に分析している。また、ホームグループに戻った際に質問されることを予想し、自分の考えを問い直し、互いにアドバイスする機会を設けた。

【資料8】は、ホームグループの中で、③（介護）を担当し、ジグソー班での意見交換を終えた後に、自分なりの考えをまとめたものである。この生



【資料6】ジグソー班



【資料7】視点毎の議論

んできたICEモデルを参考にした学びの振り返りに大きな影響を受けている。
 これまで、振り返りを、以下の3つの視点で行ってきた。

- ①「知る・できる（学習した内容はどんなことか）」
- ②「つなぐ（以前学習した内容や他教科とのつながりは何か）」
- ③「生かす（実生活や実社会にどのように生かすことができるか、新たな問いは何か）」

3つの視点で振り返ることを習慣化したことで、生徒が学びを自覚化（メタ認知）する効果を発揮し始めたのではないかと考える。これまで取り組んできた3つの視点自体が、生徒に内在化され、道具化されていった結果、単元や領域毎に取り組んできた学びが内容のみにとどまらず、どのようなことと関連しているのか、実社会にどのように生かすことができるのかという学習を振り返る際の視点として生まれ、定着した結果であると考えられる。

4 成果と課題

(1) 成果

パフォーマンス課題を設定し、解決に向けた論点を提示したことで、全員が課題を把握しやすくなった。また、ジグソー学習等を取り入れ、立場を明らかにして議論を行うことで、自分の考えを広げる・深める課題追求が可能になった。

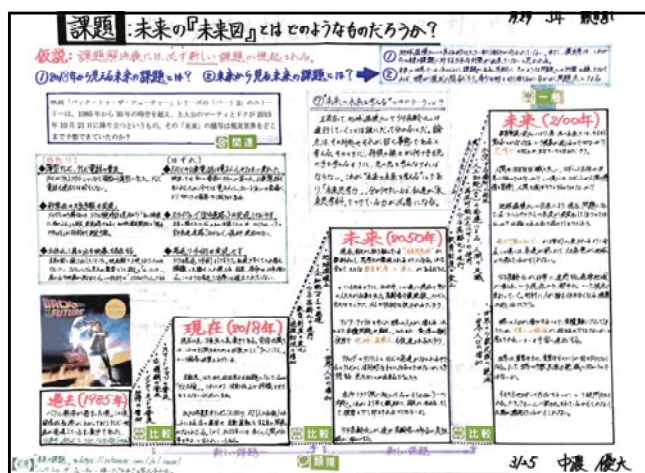
さらに、課題解決場面での問い直しや3つの視点による振り返りが定着することで問題解決過程を生徒が意識するようになった。

【資料11】は、総合的な学習の時間に作成したレポートである。この生徒は、「未来の『未来図』はどのようなものか」という課題を設定し、映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」で描かれた近未来（2015年）がどの程度現実の世界に当てはまっているかを項目毎に比較して明らかにしながら、さらにその先の未来を類推し、未来への変化を一般化することを試みている。課題を追求し、一般化してまとめることで、より実行可能な解決策を構想するという課題解決の過程を意識した学習を進めることができている。これは、社会科が目指す社会参画力の育成につながるものである。

(2) 課題

各教科の内容を分析し、教科等横断的な視点から見た学習課題レベルを設定することはできたが、各教科の特有の見方・考え方を働かせる学習課題を設定するまでには至らなかった。また、様々な視点で議論することで考えを広げることができるが、最適解を導く根拠の正しさを追求しにくくなってしまい、考えを深めることには至らなかった。さらに、生徒の新たな問いを生かしたPDCAできる単元開発に教師が取り組む時間的余裕が持てなかった。

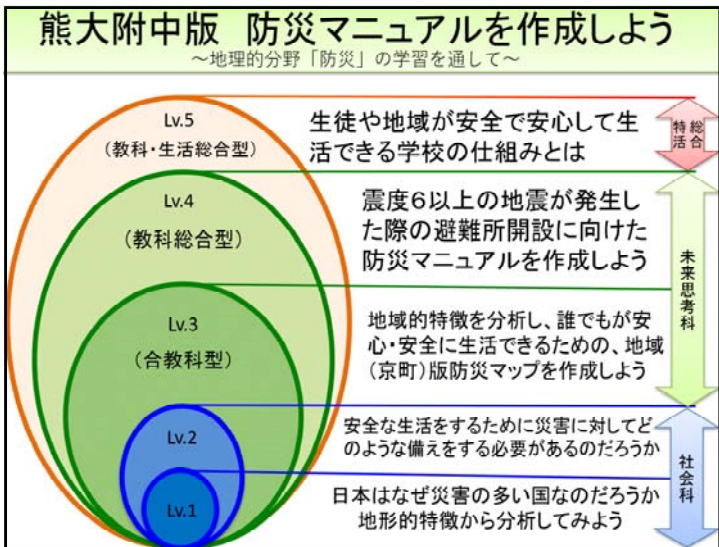
今後、問題解決の過程を意識し、社会参画力が育成された生徒を、どのような手立てで民主的な国家・社会の形成者に高めていくのか、主権者の存在意義と時代の変化から政策的思考の必要性等についても検討していきたいと思う。



【資料11】 問題解決過程の振り返り

【参考文献】

- 江口勇治 (2018) 『21世紀の教育に求められる「社会的な見方・考え方」』(帝国書院)
 工藤文三 (2018) 『平成29年改訂中学校教育課程実践講座「社会」』(ぎょうせい)
 西岡加名恵 (2017) 『パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる』(学事出版)
 熊本大学教育学部附属中学校 (2017) 『平成28年度研究紀要「未来を拓く力」を育成する教育課程の開発(3年次)』
 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 社会編』



資料1 防災マニュアルにおける課題のレベル